Ⅱ遺　　構

1　遺跡の概観

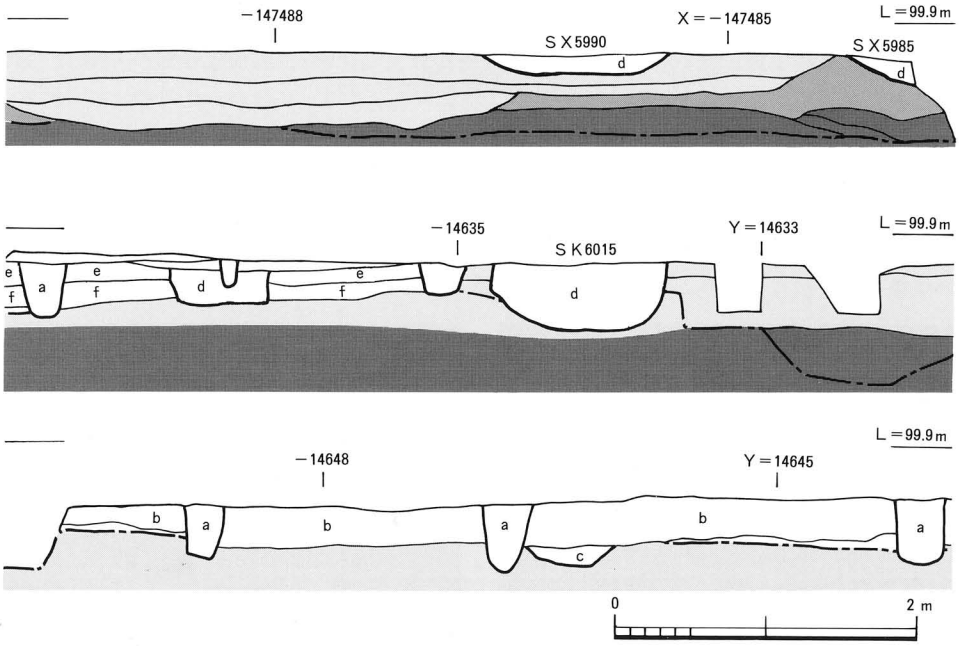
調査地は、春日（御蓋）山西南麓から派生した、西へ緩やかに傾斜する扇状地上に立地しており、西方に隣接する運動場とは１ｍ程度の段差がある。

調査地の基本的な層序は上から造成土（厚さ1.8～0.8ｍ）、耕土層（同20～30㎝）、橙黄褐色砂質土層（同50㎝、地山）が堆積し、以下礫層と粘土・シルト層の互層が続く。橙黄褐色砂質土層以下での遺物の出土は認められなかった。

耕土層の堆積は調査区西半部に限られる。この層の上面から、歩兵奈良連隊の練兵場に関連する遺構や、旧講堂の基礎地業が掘り込まれている。

調査区東半部では、橙黄褐色砂質土層にまで、旧講堂の造成にともなう削平が及んでおり、水平に削平された橙黄褐色砂質土層直上に、造成土あるいは攪乱土が堆積している。旧講堂の造成にともなう削平面の標高は99.7ｍである。調査区西半部では、橙黄褐色砂質土層は西へ緩やかに傾斜しながら堆積しているが、調査区西端部付近には耕作地の境界があるために、そこで30㎝の段差がついて一段低くなっている。西端部での橙黄褐色砂質土層上面の標高は98.7ｍである。

遺構は橙黄褐色砂質土層上面で検出した。



a:暗灰色砂質土　b:耕土層　c:暗灰褐色砂質土層　d:黒褐色砂質土層　e:暗褐色砂質土質　f:黒褐色粘質土層
橙黄褐色砂質土層　礫層　シルト層

fig. 2　調査区土層図（上：調査区東半、中・下：調査区南半）

2　遺　　構

遺構の残りは非常に悪く、残存部分は調査区中央部に限られている。主な遺構には、古墳3基（SX5985・5990・5995）、掘立柱建物2棟（SB6000・6005）、井戸1基（SE6010）、土坑、溝などがある。これらの遺構も、上半部は大きく削平されている。

A　古　墳

SX5985　調査区中央部の北半部において古墳の南半部を検出した。一辺ないし直径12～13mの方墳ないし円墳と考えられるが、破壊が著しいため不詳。墳丘は完全に削平されて残らない。埋葬主体部は不明で、周溝が僅かに残る。周溝は東辺、南辺、西辺に部分的に残る。周溝は残存部で幅2.4m、深さ25cm。西辺の周溝は深さ5cmである。埋土は黒褐色砂質土(15cm)と黒灰色粘土(10cm)。黒褐色砂質土中より埴輪片、土師器片少量が出土した。

SX5990　調査区中央部、SX5985の南東に位置する。一辺ないし直径10m前後の方墳あるいは円墳。東半部と南半部は完全に失われている。墳丘は削平されて残っておらず、埋葬主体部も失われる。周溝は西辺部と北辺部に一部が残存する。残存部の周溝の規模は、西辺の周溝が幅2～2.3m、深さ10cm、北辺の周溝が幅1m、深さ10cm。北辺と西辺の周溝は連結しないが、後世の削平によって途切れたものか、周溝本来の形態なのかは明かでない。周溝の埋土は黒褐色砂質～粘質土で、土師器細片が少量出土した。

SX5995　調査区中央部南端、SX5990の南西に位置する。一辺ないし直径10m前後の方墳あるいは円墳か。墳丘は大部分が調査区外にあり、しかも検出部分は旧講堂の基礎地業により、大きく破壊されている。周溝北端部のみを検出し、埋葬主体部は不明である。周溝は残存部で幅2m、深さ30cm。埋土は暗褐色砂質土（15cm）、黒褐色砂質～粘質土（15cm）で、少量の土師器細片が出土した。

B　掘立柱建物

SB6000　調査区中央部で検出した東西棟。梁間2間、桁行2間以上。削平のために、側柱は南・北側とも東妻から1間分しか検出できず、全体の規模は明かでない。建物の主軸は東でやや南に振れる。梁間柱間1.8m等間、桁行柱間2.7mである。柱穴は、平面形が

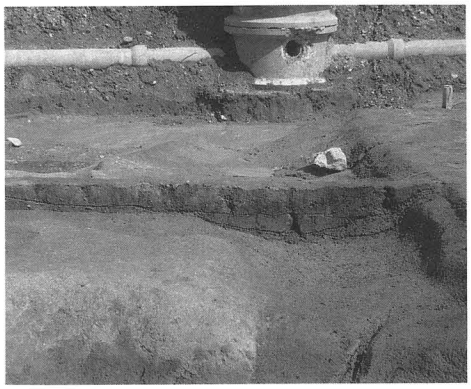


fig. 3　SX5985周溝（南から）

fig. 4　SX5990周溝（南から）

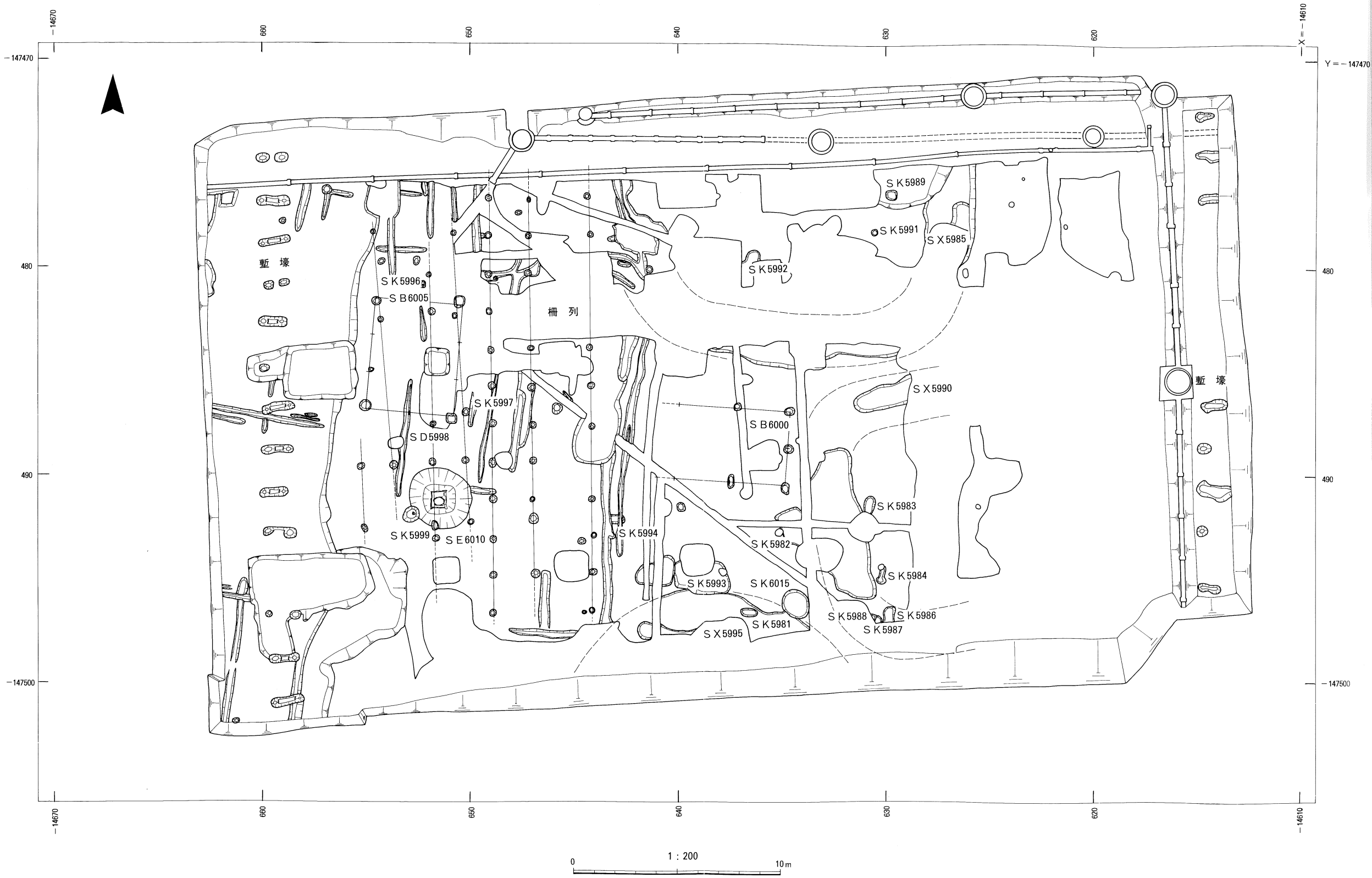


fig. 5　東紀寺遺跡（平城宮跡第240次）発掘遺構図

一辺40～50㎝の長方形ないし長円形の小規模なもので、深さは30～40㎝残っている。時期の明らかな遺物は出土しなかった。

SB6005　調査区北西部、井戸の北部において検出した柱穴・小穴の一群。耕作による柱穴の削平が著しく、建物としての明確なまとまりをもたない。あるいは柵や塀のようなものかもしれないが、とりあえず南北棟建物と考えておく。規模は東西長4.2ｍ、南北長5.4ｍ、３間×２間ほどであろうか。SB6000の方位にほぼ揃う。時期の明らかな遺物は出土していない。

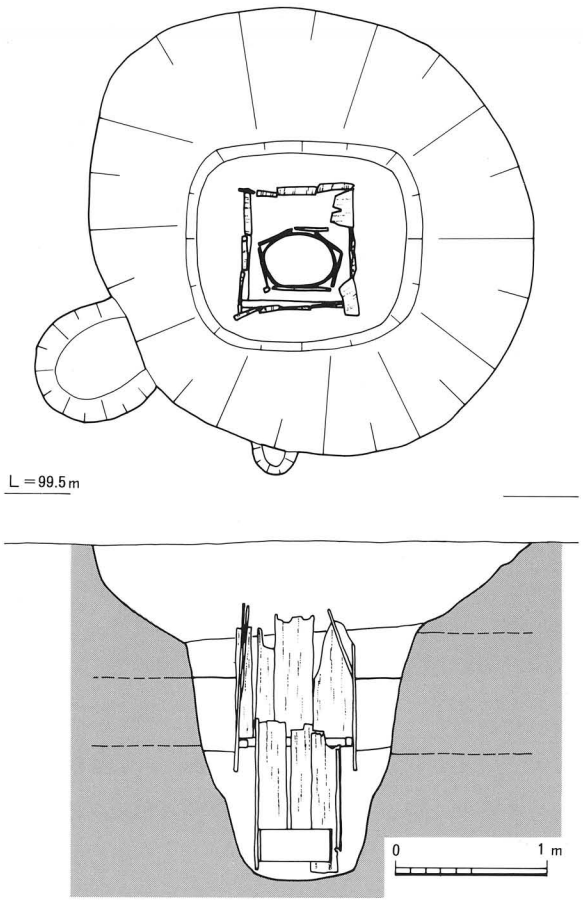


fig. 6　SE6010

C　井　戸（fig. 6）

SE6010　調査区西南部に位置する井戸。掘形は平面円形で、検出面の直径3.1ｍ、検出面からの深さは2.2ｍあり、３段掘り構造。検出面から50㎝下で段がつき、一辺1.5ｍの隅丸方形に狭まり、そこからさらに1.2ｍ下で直径１ｍに縮小して段がつき、底部はそこから50㎝下にある。底面の直径は50㎝。掘形は礫層の下層である青灰色シルト層に達しているが、現状では地下水の湧き出しは見られなかった。

井戸枠は３重構造になっている。上半部は方形縦板組横桟どめ型式、下半部は一回り小さい平面６角形の縦板組で、底部に円形曲物を据える。上半部の井戸枠は、幅20～30㎝、長さ1.2ｍ以上、厚さ４～５㎝の縦板を、一辺に３～４枚立て並べ、５㎝角の横桟で支持する。枠の内法は70㎝程度である。下半部の６角形井戸枠は、幅20～40㎝、長さ0.7～１ｍ、厚さ２～３㎝の縦板を並べる。内法は長径50㎝、短径35㎝である。曲物は下半部の井戸枠に内接しており、内径が33×45㎝、高さ22㎝である。

井戸中央部では、検出面から50㎝の深さまで耕作による攪乱を受けていた。井戸枠内には、暗灰色粘質土あるいは砂混じり灰黒色粘土が堆積し、軒平瓦、９世紀前半～中頃の緑釉陶器・土師器・須恵器等が出土した。また検出面より約１ｍ下において、井戸西辺部の掘形埋土中から、奈良時代後半の土馬が出土した（fig. 7）。土馬は、既に頭部と脚の一

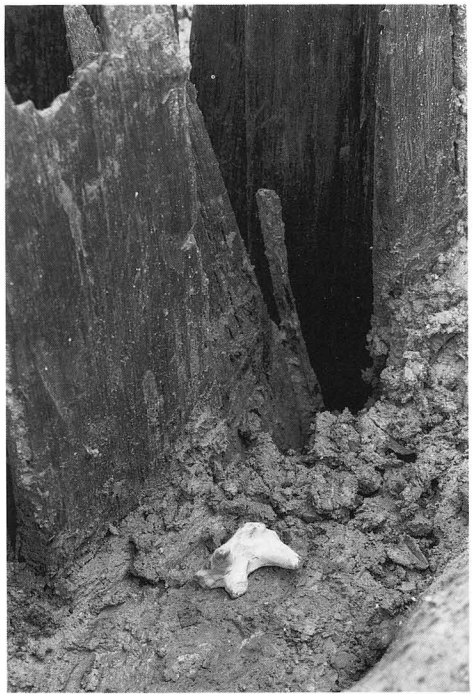


fig. 7　SE6010土馬出土状況

部が失われており、失われた部分は井戸掘形埋土中からは発見できず、偶然、埋土中にまぎれこんだものとも考えられる。また、その他の祭祀遺物も伴出しなかった。従って、井戸構築時に行われた祭祀にともなう土馬とは断言できない。

D　土坑・溝

SK6015　平面円形の土坑。残存部の直径1.3×1.5m、深さ45cmあり、土坑底部は砂礫層に達する。黒褐色砂質の埋土上部から、奈良時代後半～末頃の須恵器・土師器や土馬が出土した。SX5995に接する。

SK5981　不整な円形を呈する土坑。残存部の直径0.8m、深さ30cm。埋土は黒褐色砂質土。遺物は出土しなかった。

SK5982　不整形土坑。残存部は東西長1.3m、南北長1.9mあり、深さは約10cmである。調査区南辺中央部、SX5990の西側で検出した。旧講堂の排湿用暗渠により分断される。周溝の埋土は黒褐色砂質土で、遺物はほとんど出土しなかった。

SK5983　平面長円形の小土坑である。調査区南辺中央部で検出した。SX5990の西辺周溝の東に接する。南端は撹乱坑により破壊される。残存部の直径は南北0.8m、東西0.5m、深さ10cmである。埋土は灰褐色～暗灰色砂質土で、出土遺物はほとんどない。

SK5984　不整形土坑。調査区南辺中央部、SK5983の南側で検出。SX5990の西辺周溝の東に接する。北端は撹乱坑により破壊される。残存部の東西長0.4m、南北長0.9m、深さ5cmであり、埋土は黒褐色砂質土で、出土遺物はほとんどない。

SK5986　不整形な小土坑。SX5990の西辺周溝の南延長線上に位置しており、あるいは古墳周溝の一部かもしれない。南端は旧講堂基礎地業の破壊により失われる。残存部の南北長0.7m、東西長0.6m、深さ3cmあり、埋土は黒褐色砂質土、出土遺物はほとんどない。

SK5987　小土坑。SK5986の西隣で検出した。旧講堂基礎地業により大きく破壊される。SX5990の周溝の一部かもしれない。残存部は東西、南北とも長さ0.4m、深さ3cm。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物はほとんどない。

SK5988　小土坑。SK5987の上にある。旧講堂基礎地業により大きく失われる。残存部は東西、南北とも長さ0.3m、深さ6cm。埋土は茶褐色砂質土。出土遺物はほとんどない。

SK5989　調査区北辺部で検出した、不整方形の小土坑。残存部の一辺0.5m、深さ7cm。埋土は黄灰褐色砂質土。遺物はほとんど出土しなかった。

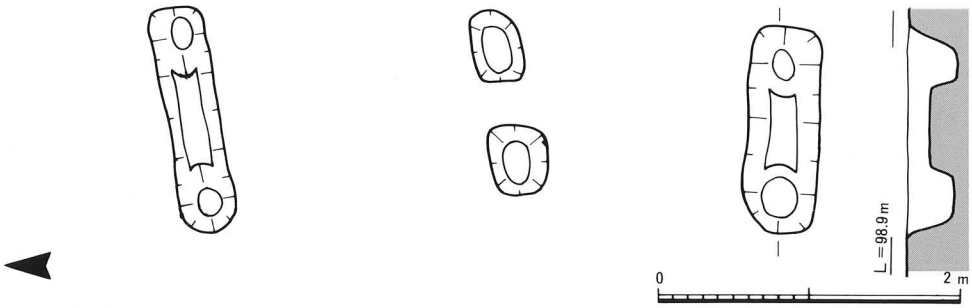


fig. 8　塹　壕

SK5991　調査区北辺部で検出した、円形小土坑。残存部の直径0.4m、深さ５㎝。埋土は黄灰褐色砂質土、遺物は出土していない。

SK5992　調査区北辺部で検出した、不整形土坑。旧講堂の基礎地業により著しく破壊される。残存部の東西長2.4m、南北長1.8m、深さ10㎝。埋土は黄灰色砂質土。遺物は出土しなかった。

SK5993　調査区南辺中央部で検出した、大型の長方形土坑。一部分は旧講堂の基礎地業のために失われる。残存部の東西長2.7m、南北長1.6m、深さ25㎝あり、埋土は黄灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SK5994　調査区南部中央で検出した小土坑。耕作溝により破壊される。残存部の東西長0.7m、南北長0.4m、深さ10㎝。埋土は青緑灰色混じりの褐色粘質土。出土遺物はない。

SK5996　SB6005の北部で検出した小土坑。北半部は撹乱により失われる。残存部の直径25㎝、深さ5㎝。埋土は灰緑色粘質土。遺物は出土していない。

SK5997　SB6005の南西隅付近で検出した円形小土坑。残存部の直径0.4m、深さ５㎝。埋土は灰緑色粘質土。遺物の出土はなかった。

SK5999　SE6010井戸掘形南端で検出した長円形の小土坑。残存部の直径は東西0.3m、南北0.5m、深さ15㎝。埋土は茶灰色混じり褐色砂質土である。遺物の出土はなかった。

SD5998　SB6005の南で検出した南北溝。幅30～40㎝、深さ10㎝。埋土は灰緑色砂質土。

E　その他の遺構

耕作溝27条を検出した。南北溝の方位は北でやや東へ振れ、東西溝の方位は東でやや南に振れる。いずれも埋土は灰色砂質土である。

練兵場の遺構と考えられるものに塹壕と柵列がある。塹壕（fig. 8）は調査区の東端部と西端部で出土した。底部付近が残るのみであるが、長さ1.5m、幅0.5m、深さ30㎝の東西に細長い小溝が、1.5～1.8m間隔で南北に一列に並ぶ。調査区西端部では13基、東端部では８基検出した。塹壕は底部の形態に特徴があり、中央が長さ50㎝程度の台状に高まり、両端部は中央より15㎝程度低く掘り窪められている。柵列は塹壕の列と方位を揃える。耕作溝の上から掘りこまれており、耕作溝よりも新しい。西端部の塹壕の東側で集中して出土した。直径30㎝ほどの小穴が東西６～７列、南北12列の桝目をなして並ぶ。